

ラオス北部フアパン県サムヌア郡における象獅子紋様の研究

—ラオ・タイ系諸族の紋織物を通して—

東京藝術大学大学院美術研究科

先端芸術表現研究領域

学籍番号 1319926

島崎紗椰

要旨

ラオス北部フアパン県サムヌア郡のラオ・タイ系諸族の織物に象られるシーホ(象獅子)紋様は、ラオスで親しまれている神獣紋様のひとつである。象頭に獅子の体、鳥の足をもつキマイラの姿で象られる。本論では、シーホ紋様の多様な装飾パターンに注目した。頭身を草花で飾り、背上に人型や建造物を乗せ、体内には同種もしくは異種の生き物を内蔵する。ラオスの織り手に、シーホ紋様を構成するこれら諸模様について尋ねると、様々な名称が返ってくる。ラオスのシーホ紋様の装飾パターンを整理し、その複雑な造形的特徴と多重なイメージについて考察する。

ラオス人民民主主義共和国は、タイ、カンボジア、ベトナム、中国、ミャンマーに囲まれた内陸国であり、山岳地帯と国土を縦断するメコン川の恵みを受ける。14世紀にラーンサーン王国(百万頭の象の王国の意)として統一され、東南アジアの緩衝国家として成長した。2021年現在、国民は50の少数民族グループに分けられる。第1章では、ラオスの歴史的背景について述べ、多民族の文化がどのようにして保たれてきたのかを確認する。

第2章では、シーホ紋様の基本的な造形的特徴と象徴性について述べる。シーホはもともとヒンドゥー教および仏教の物語に登場する神獣であり、ラオスの仏教寺院の壁画、レリーフにも表れる。仏教の教えを視覚的に説明する役割があり、シーホの象頭は慈悲を、獅子の体は力強さ、統率力を象徴する。

16世紀半ばから17世紀頃に書かれたとされる、ラーンサーン王国の叙事詩人パン・カムの詩『Sang Sinxay(シンサイの歌)』では、人間の王族の一員として、象頭に獅子の体をもつシーホが登場する。ヒンドゥー教および仏教の影響を受けて書かれたこの詩では、シーホは強い力で悪鬼と戦い、シンサイ王子を助ける男児として描かれる。このシーホのイメージはラオスの織り手にも広く知られており、現地で行った聞き取り調査でも、ほとんどの織り手がシンサイの物語について答えた。

しかし織物のシーホ紋様は、体内に生き物を宿した姿で象られるなど、妊娠と出産を象徴するパターンが多く観察された。この特徴はヒンドゥー教および仏教のシーホ図像、物語には認められ

なかった。

シーホ紋織物の使用例として、先行研究資料では、赤ん坊のためのねんねこ半纏、ブランケット、シャーマン儀礼に用いられるヘッド・クロス、ヒーリング・クロス、葬儀に用いられる棺桶カバーなどが記録されていた。一方で筆者が収集した、2000年以降に製作された織物の資料では、女性用のショール、壁掛け、テーブルクロス、シンと呼ばれる伝統的な女性用巻きスカートに加工される例が多い傾向にあった。

第3章では、収集した織物の現物、画像、先行研究資料の画像をもとに、シーホ紋様を構成する諸模様を ①同種の生き物を体内に内蔵する ②異種の生き物を体内に内蔵する ③頭身を飾る草花模様 ④背に乗る人型および建造物模様 の4つのパターンに分類し、他の神獣紋様の装飾パターンと比較した。

結果、ホーン（神話上の鳥）紋様とナガ（川蛇もしくは龍）紋様の装飾パターンとの類似性が観察された。シーホ紋様は仏教におけるシーホ図像の特徴を引き継ぎつつ、より古い時代からあったホーン紋様やナガ紋様の装飾模様を内蔵していったと考察された。いくつかの装飾模様は、シャーマニズム的解釈と仏教的解釈によって異なるモチーフに捉えられており、シーホ紋様のイメージを複雑にさせる一因となっていた。

第4章では、4つの装飾パターンの由来を追求した。そしてホーン紋様、ナガ紋様の象徴性がシーホ紋様のイメージに与えた影響について考察した。

中国神話を由来とするホーン紋様は、草花の咲き乱れる楽園の世界観をシーホ紋様と共有した。また同異種の生き物を体内に内蔵する、人型模様を背上に乗せるといった装飾パターンも共通しており、これは生まれてくる赤ん坊や死者の魂を運ぶ姿を表現している。ホーンは天上の世界から魂を連れてくると信じられていたためであり、シーホもまた魂を運ぶと考えられた。これは仏教美術における、神族を背に乗せて運ぶシーホ図像とも親和性が高い。

一方でナガ紋様は魂を守護する神獣と考えられた。妊娠したナガは興奮して、強い呪力を発揮するとされ、シャーマン儀礼に用いられるヘッド・クロスや、部屋を悪霊から守るドアカーテンなどに好まれた。呪術的な儀式で用いられる織物には、妊娠したナガとシーホがともに象られ、シーホの頭身の一部がナガに変身する例も見つけられた。

ホーンの魂を運ぶイメージと、ナガの魂を守護して育むイメージが、シーホ紋様には共存しており、造形的特徴および紋様の使用例に表れていた。

本研究ではサムヌア郡に暮らすタイデー族、タイダム族の資料を中心に扱った。とくにタイデー族はパー・チョック（多色の緯浮織り）の技術を誇っており、ラオスの織物市場でも高い評価を得ている。その地方技術はサムヌア織りと呼ばれ、緻密な幾何学紋様で神話上の生き物や動植物のモチーフが表現される。アニミズム、シャーマニズム、ヒンドゥー教、仏教が複雑に融合された世界観が観察される。

現地調査は2016～2019年の各年に行なった。訪れたのは、ヴィエンチャン県、ルアンパバン県、サイヤブリ県、フアパン県、シェンクワン県である。文献調査と現地調査から得られた情報を照応し、研究を進めた。